

こころのゆき

みくにのきさ

はつれ

かりごう

も

かへすを

いかにうらみ

さかへ

は

た。

古道の傍ら朽ち毀たれ苔生す道祖神の石像か、龍安寺石庭、あ
たかも、結跏趺坐する釈迦牟尼如来のように。あらゆる想い、考概、かたち、囚われか
ら解脱し、尼連禪河の畔の菩提樹の下、鹿すらも黙考する鹿野苑に在せしときのように。
又は儼かしく聳える靈鷲山の鷲頭のごとき大巖の裾又或いは祇園精舎の双つの沙羅の樹
の下に涅槃を究竟し、静かさ（ヘーシュキア Houxia）に在せしときのように。

若しくは、般若波羅蜜多を棹とし渉る、阿耨多羅三藐三菩提の解脱の岸に繚乱する曼珠沙
華のごとき胎藏界曼陀羅、明晰鮮裂なる金剛界曼陀羅、その両曼陀羅の中枢央に荘儼され
る大日如来、すなわち、大毘盧遮那仏のように。

将又、半跏坐にて中指を頬に当て思惟する弥勒菩提薩埵の御姿か。将又或いは、印契を組
みて真咒を口誦し鎮座まします觀自在菩提薩埵の様。透きとおりあきらかなる寂。

それら古き木佛が侘しき古刹の本堂にしまりぬ。

ありきたりな、風のない、小春日和の、秋の乾いたあかるい、透明な翳りのある、みちあ
ふれた光のなか、ただ、たたずむ高麗門のようであった。網膜に沁み入るような明晰さ。
澄み燦めくような閑。かるやかでどこか愉しげなのに、沈として儼かであった。

日常は摩訶不可思議のことばかり。

電信柱の柱上変圧器に坐り込む悪鬼羅刹、鴈が郵便局でペンを走らせ、渋谷路上でムカデや蟲や魑魅魍魎の萬華繚乱、見向きもせずにもンションの屋上にて黄昏を遠望する龍神、悠々たる一片の高雲に頬杖突いた蝦蟇蟾蜍が考える人のよう哲學し給ふ。

脳神経細胞は思慮から解放され、言語や論理の縛りもなく、ただ、自由に、想いを翔廻らせ、竹筥の穂尖を翻し、楮の纖維を漉いて重ねた紙に、経文の漢文字を書く。筆持つ掌は仰勢平勢俯勢をかわるがわるに、垂露龍爪の巧みを尽くし、躍るよう紺碧の天穹を自在に廣がる。

もはや、*Ourpos* が観^みずるものを、論理や言語からは追えない、何千兆光年も離れた遠い彼岸の彼方にあつた。

思考の範疇を越え、意識に能わず、知覚不能であつた。

Ourpos が観^みるものは、もはや我々が観^みるものと同じではない。

偉大な詩人ホメロスの名を躬^こらに冠した。躬^こらの手で、躬^こらの頭上に戴冠したナポレオンのように。彼女は躬^こらの名を躬^こらで考え、決め、宣言した。智慧の女神のように決然たる意思によって光り輝く双眸。

アテーナー (*Ἀθήνη*) ・パルテノス、処女神アテナのように、燦燦とまぶしい。しかし、その姿は少年のように繊細な瘦身の、未だ青い少女に似たアンドロギュヌスである。